

平成22年6月7日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520138

研究課題名（和文） 初期読本の総合的研究

研究課題名（英文） Synthetic researches on early Yomihon-novels of the Edo period

研究代表者

長島 弘明（NAGASHIMA HIROAKI）

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：00138182

研究成果の概要（和文）：18世紀後半に、主として知識人によって書かれた初期読本を、様々な観点から検討し、次のような新しい知見を得た。漢学を知識基盤とする作者が書いた和漢混淆文の作品は、近世初期の朱子学者の歴史論からの影響が強く、国学を知識基盤とする作者が書いた和文の作品は、彼らにとって、随筆や紀行・書簡などと並ぶ、多様な和文創作の試みの一つとして考えられていた。また、作者の世代が下るに従って、作品から思想的なテーマが減少し、構成を重視した娯楽性が強くなって行く。

研究成果の概要（英文）：The early Yomihon-novels mainly written by the intellectual in the second half of the 18th century were examined from various viewpoints, and the following new knowledge was acquired. The early Yomihon-novels of literary Japanese and Chinese written by the authors who made a study of the Chinese classics had the strong influence from the historical essay of the doctrines-of-Chu-tzu person in 17th century, and the early Yomihon-novels of classical Japanese written by the authors who made a study of the Japanese classic were considered for them as one of the trials of various creative writings of classical Japanese on a par with essays, accounts of the trip, letters, etc. Moreover, an ideological theme decreased from the early Yomihon-novels, and the enjoyableness increased as the author's generation went down.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：初期読本、和文読本、国学、都賀庭鐘、上田秋成、建部綾足

1. 研究開始当初の背景

江戸時代中期の十八世紀に上方を中心に

発生した新しい小説様式である、都賀庭鐘・建部綾足・上田秋成らの初期読本は、それま

での小説の主流であった浮世草子とも色々な点で異なり、またその後江戸で成立・成熟する、山東京伝・曲亭馬琴らの後期読本とも、様々な面で相違している。初期読本の研究に関しては、一定の研究蓄積がある上田秋成の『雨月物語』『春雨物語』の二作についての作品論を例外として、研究が十全に進展しているとは言い難かった。

例えば、読本発生の背景や経緯については、中村幸彦「読本発生に関する諸問題」（『中村幸彦著述集』所収）という古典的なすぐれた業績があるが、この論文にしても、論の主力は後期読本の成立のメカニズムと周辺事情の解明に向けられ、初期読本成立の要因については詳述されていないが、その後の研究でも初期読本の発生を正面から論じるものはほとんどない。また、知的・術学的な性格を持つ読本の作品論には、作品と作者の教養基盤（国学・漢学・和歌・俳諧・漢画等）の関係の解明が不可欠なはずであるのに、作家研究と有機的に組み合わせられた作品論もほとんど存在しなかった。また、後期読本研究では、すでに作者と出版書肆の関係についての研究が相当に進んでいるが、初期読本については、長島弘明「作者・絵師・書肆・読者―秋成と綾足の物語を例に一」（『日本文学講座物語・小説Ⅱ』大修館書店）などわずかである。さらに、個別の作品論、個別の作家論を離れて、初期読本の特徴を全体的に見渡す研究に至っては、試みられたことがないといっても過言ではない。都賀庭鐘・建部綾足・上田秋成以外の初期読本の作者も、研究の視野には入らないまま今日に至っていた。

申請者の長島は、初期読本の代表的な作家である建部綾足・上田秋成につき、それぞれ『建部綾足全集』（国書刊行会）『上田秋成全集』（中央公論社）を編集（共編）し、その文業の網羅的な把握と、その内容の克明な検討に努めてきた。また、都賀庭鐘・建部綾足・上田秋成らの伝記的事実の掘り起こしにも相当の注意を払い（『建部綾足全集』全集付載の建部綾足年譜、吉川弘文館から刊行予定の人物叢書『上田秋成』等）、彼らの拠って立つ教養基盤の解明にも努力してきた。その過程で、それぞれの作家の初期読本作品の特徴は各人の文人的素養の質と不可分であること、初期読本作品（小説）とそれ以外の彼らの活動ジャンル（国学・和歌・俳諧等）はきわめて密接な関係があること、素材から文体に至るまで作家によって様々な相違があるものの、その相違を超えてテーマ・小説技法には共通するものがあること、初期読本発生の背景や基盤としては、従来言われているような明末の中国白話短編小説集の影響以外にも、歴史を題材にした様々な創作的文章の伝統があること、作者と出版書肆の関係が作品の内容を規定することがあること、等々

に思い至った。申請者がこれまで積み重ねてきた、作家の伝記研究、書誌学的・文献学的研究、小説の作品論等々を有機的に再統合して、従来の研究では不明であった、初期読本に関する様々な課題の解決に当たりたいと考えた次第である。

2. 研究の目的

3年の研究期間の間に、以下の諸点につき検討を加えることを研究の目的とした。

(1)漢学を主な教養基盤・思想基盤とする都賀庭鐘と、国学を主な教養基盤・思想基盤とする建部綾足・上田秋成の読本作品が、どのような相違を示しているか、また、同じ県門の国学者である建部綾足と上田秋成の読本の特徴の相違は何に由来するか、さらに、教養基盤・思想基盤の個性を超えた初期読本通有の特徴とは何かを明らかにすること。

(2)初期読本という小説と、漢学・国学・和歌・俳諧・絵画・煎茶・書道等の他ジャンルとの関係を、小説中に直接反映されている他ジャンルの影響という点から、小説の素材、文章の典拠、知識的言説、挿絵等にわたり考察すること。また、直接的な影響のみならず、小説論、文体論、小説のテーマや登場人物の造型等に、間接的・理念的に反映している他ジャンルの影響を明らかにすること。

(3)初期読本は上方で成立し、後期読本は江戸で成立しているが、初期読本と後期読本の特徴の相違（短編集か長編か、高踏か娯楽的か、テーマ重視かストーリー重視か、文人作者か職業的戯作者か、等々）が、上方と江戸のどのような小説伝統の相違、どのような文学思想の相違に由来するのか、明らかにすること。

(4)初期読本成立の背景として、漢文・和文で書かれた創作的文章の伝統を検討すること。具体的には、漢学者たちの残した歴史上の人物伝・人物論、史上の事件の外伝的戯筆、国学者のたちの残した戯物語的文章、『古状揃』等の往来物における偽作の歴史的書簡等々を可能な限り収集し、歴史小説としての初期読本が、これらの先行する創作的文章の直接的・間接的な影響を、どのように受けているかを明らかにすること。

(5)建部綾足と梅村宗五郎、上田秋成と野村長兵衛等、初期読本の作者と版元（出版書肆）の関係を具体的に考察し、個別の作品の出版の経緯と、作者と版元の関係が作品内容に与えている影響を明らかにすること。その際、初期読本作品の出版についてのみの検討を

行うのではなく、その書肆の出版活動全体の傾向と、出版活動全体に占める初期読本出版の意味を勘案しつつ、考察を進める。

(6)初期読本の作者のうち、第一世代の都賀庭鐘、第二世代の建部綾足・上田秋成に続く、第三世代ともいべき伊丹椿園・前川来太らの作品について分析し、初期読本の変質の様相について明らかにすること。

(7)地域的ないし時代的には後期読本に分類される村田春海『竺志船物語』、石川雅望『天羽衣』『飛弾匠物語』等の江戸出来の和文読本が、初期読本との共通性を強く持っていることを明らかにし、またその理由を明らかにすること。

以上の(1~)(7)の全体について、補足的な説明を加える。

読本研究は、近時、山東京伝・曲亭馬琴らの後期読本に偏り、初期読本の研究がはかばかしい進捗を見ていないというのが現状である。初期読本研究の分野では、例外的に盛んであった上田秋成の『雨月物語』の作品論、同『春雨物語』の諸本論・成立論が一種の飽和状態に陥っている現在、ますます閉塞感が募っている。原因は、従来の初期読本の研究が、作品論や諸本論の個別の研究領域・研究方法に自閉しがちで、それらに作家論を加えて自由に行き来する方法の自在さや、小説ジャンルを隣接のジャンルとの関係から見ようとする視野の広さに、欠けることがあったためであろう。

本研究では、作家の教養基盤・思想基盤の分析という、作家論・伝記研究に属する課題と、初期読本作品の内容の分析という作品論に属する課題を、分離することなく、むしろ一体のものとして考察していこうとする点に特色がある。思想的な問題を、ことさら作中のテーマとして書き込む初期読本には、本来、こうした考察の方法が不可欠であるはずである。漢学を教養・思想基盤とする都賀庭鐘のような漢学系文人と、国学を基盤とする建部綾足・上田秋成のような和学系文人は、名分論・人性批評等の作品のテーマ設定において、顕著な違いがあるように思われる。

また、読本というジャンルに視野を限定することなく、隣接する様々な学芸ジャンルとの関わりにおいて作品を考察しようとする点も、本研究の独創的な点である。初期読本の作者たちは、いずれも文人と呼ばれる多芸多能を身上とする芸文家であり、ジャンルを横断的な業績を残している事実一つをとってみても、様々なジャンルとの関係の中で考察を進めようとする本研究の方法の妥当性は保証されよう。申請者は、建部綾足・上田秋成に関しては、小説以外の業績について

も資料収集をかなりの程度まで進めており、これに都賀庭鐘の学芸関係資料を加えて、全体的な考察を開始することとした。初期読本がいかにも小説的な要素ばかりから成り立っているのではなく、ある時は国学・漢学・唐話学研究成果の一端を披露する場であったり、文人趣味的な脱俗境への希求を満たす場であったりすることを明らかにすることが、江戸時代小説にとって、小説的な要素とは何だったのかという問への答えの一つともなり得るのである。

また、初期読本の源流を求め、成立の背景をさぐる考察については、考察範囲を従来言われていた中国白話小説や漢学者の歴史叙述から、和文・漢文で書かれた様々な創作的文章に広げたことも、新たな試みである。特に、「腰越状」等の、『古状揃』等に出る偽書簡が、歴史小説の一種として初期読本につながってくるという想定は、独創的といってもよい。初期読本が、史実をふまえながら、その史実に虚構を施してゆく方法の一端を、これらの偽書簡の分析を通じて明らかにすることを目標とした。

初期読本を「上方」読本ととらえる視点、版元との関係で作品をとらえる視点、上田秋成以後の初期読本を対象としてとりあげる点、初期読本と和文で書かれた後期読本の類似性を求めようとする点等も、初めての試みである。これらの観点からの考察は、読本の地域的性格、作品内容への版元の直接・間接の関与、初期読本内部での変質・変遷という、新たな読本研究の課題の提出を意味し、また初期読本と後期読本との共通性・異質性の再検討を促すものである。従来の固定的な初期読本研究の枠組みを少しでも崩して、在来の近世文学史における初期読本の性格についての平板な記述を改めることを目的とした。

3. 研究の方法

3年間の具体的な研究方法を、年度順に掲げる（(1)(2)等の項目番号は通し番号とした）。

（平成19年度）研究の初年度に当たる本年度は、資料調査と資料収集を中心として、次のように研究を進めた。

(1)初期読本の作者のうち、中核となる都賀庭鐘・建部綾足・上田秋成の文学的業績、および文学以外の諸ジャンルにおける業績を再整理し、未発掘の資料を収集した。庭鐘については、小説以外の業績について十分な探索・検討がなされているとは言い難いので、投壺関係著書、印譜、和刻版の『康熙字典』関連資料、詩文稿等の収集を進め、また読書ノートというべき『過目抄』を手がかりに、

庭鐘の教養基盤の形成に与った漢籍の調査を進めた。また、すでに全集が刊行されている（もしくは刊行の途中である）建部綾足と上田秋成については、全集の資料収集が比較的手薄であるジャンル、一例えば、綾足に関しては肉筆の漢画・俳画や画賛等の絵画関係資料、秋成に関しては煎茶や自筆歌文稿の関係資料の収集に努めた。その上で、彼らの初期読本作品とその他の学芸諸ジャンルとの、直接・間接の交渉を考察した。

(2) 初期読本が、上方の小説の伝統や、上方の文学思想をどう継承しているかを明らかにするために、時代物浮世草子の中で知識的な性格が強い作品、また上方の詩文サークル・学芸サークルが生み出した作品、また上方の国学者の著作等を調査した。特に、大阪の詩の結社である混沌社や、町人の高等教育機関であった懐徳堂の関係者には、秋成や庭鐘と交流を持つ人間も少なくないので、精査に努めた。また、江戸の談義本に対して、上方にも秋成の『癩癩談』に代表されるような談義・風刺の色合いが強い作品があるが、それらを江戸出来の談義本諸作と比較検討することによって、上方の談義本風小説の特色を浮かび上がらせ、初期読本との類似性を考察した。

(3) 初期読本成立の背景にある、漢文・和文の創作的文章の伝統を検討するために、初年度は特に『古状揃』等の種々の往来物に所収される偽作の歴史的書簡—具体的に言えば、「腰越状」「義経含状」「弁慶状」等の創作的・物語的書簡—を網羅的に調査し、それらの偽作の歴史的書簡群の種類と叙述の方法を考察した。一口に「腰越状」「義経含状」といっても、『古状揃』の版種によって細部には微妙な異同があり、また往来物以外にも同じ素材に基づいた幸若舞曲や浄瑠璃もあるので、それらの相互比較の上に検討を行えるように、なるべく広範囲な資料について調査をした。その上で、歴史小説としての初期読本が、それらの偽作の歴史的書簡から何を引き継ぎ、何を付け加えていったかを考察した。

資料調査や、写真・コピーによる資料収集と平行して、得られた書誌データ・文献データを整理し、特に、都賀庭鐘・建部綾足・上田秋成の文学的業績、および文学以外の諸ジャンルにおける業績については、一部データベースとして構築した。

(平成20年度)

研究の第2年次に当たる本年度は、以下のように研究を進めた。

(4) 初期読本成立の背景となっている、漢文・和文の創作的文章の伝統の検討については、本年度は、漢学者・国学者の文集等に収

められている史上の人物に関する伝や論、また例えば、服部南郭の『大東世語』のような正史の外伝的な人物論、創作的歴史叙述を調査・検討し、初期読本の登場人物の人物造型や史実の虚構化の方法にそれらがどう影響しているか、また初期読本が新たに成し得た独自の方法とは何かを考察した。

(5) 新しい小説ジャンルである初期読本の登場を考察するには、作家と読者を橋渡しする版元についての検討が不可欠であるところから、初期読本作品の主版元となっている書肆、例えば菊屋惣兵衛・野村長兵衛・梅村宗五郎等について、初期読本の出版に手を染めることになった理由と経緯を、作者との関係や、彼らの全出版活動の中における初期読本出版の意義に留意しつつ精査した。初期読本の成立が、作家の個人的な嗜好のみならず、当時の出版界の動向とも密接に関連する事実について考察した。

以上の調査結果・検討結果のうち、初期読本の出版に関与した書肆の出版活動については、一部データベース構築をはかった。

(平成21年度)

第3年次で最終年に当たる本年は、以下のように研究を進めた。

(6) 都賀庭鐘（第一世代）、建部綾足・上田秋成（第二世代）に続く、伊丹椿園・前川来太等の初期読本第三世代の作家の業績を精査し、初期読本の内容と方法の変質を検討した。特に、一定数の作品を残し、出自もある程度まで明らかである伊丹椿園に関しては、その作品に初期読本では珍しい長編作があることから、後期読本の特質との比較も視野に入れつつ、詳細に考察した。

(7) 『竺志船物語』『天羽衣』『飛弾匠物語』等の和文体で書かれた後期読本と、建部綾足の『西山物語』『本朝水滸伝』等の和文体で書かれた初期読本を、主として文体的な観点から、あるいは原拠の翻案手法の観点から比較し、その共通性を検討した。また、初期読本から後期読本へ継承された要素と、継承されなかった要素を分析し、後期読本に対する初期読本の特質を考察した。

また、3年間の研究の総括として、如上のような、新しい観点から初期読本の成立の要因や、初期読本のジャンルとしての特質を総合的に考察した。

3年間を通じての主要な資料調査先は以下の通りである。関係資料が点在しているため調査先は多かったが、なるべく効率的に作業を進めた。

国立国会図書館・国立公文書館・国文学研究資料館・東京都立中央図書館・早稲田大学附

属図書館（以上、東京都）、名古屋大学附属図書館・西尾市岩瀬文庫（以上、愛知県）、京都国立博物館、京都大学附属図書館・西福寺（以上、京都市）、大阪大学付属図書館・大阪府立中之島図書館、香具波志神社（以上、大阪市）、柿衛文庫・谷川邸（以上、兵庫県）、天理図書館（奈良県天理市）

4. 研究成果

(1) 初期読本の作家の中核となる都賀庭鐘・建部綾足・上田秋成に関しては、次の成果を得た。

① 庭鐘については、読書ノート『過目抄』に記された漢籍を舶載書目類と照合しつつ、庭鐘の極めて広範な読書実態を確認するとともに、読本執筆の前提になる教養基盤の一端を明らかにすることができた。

② 綾足については、密画から俳画にいたる全絵画について、現存の作品の写真撮影と過去の売り立て目録に収載される写真の収集を進めた。その過程で、従来知られていなかった作品を数点見いだすことができた。染筆年次の推定は、密画については困難をきわめるが、俳画については讃句の成立年次等を手がかりに、大部分の作品について年代をほぼ絞り込むことができた。

③ 秋成については歌文稿の全集未載の異文を中心に調査・収集を進め、そのうち『海道狂歌合』『富士山説』等のいくつかについて諸稿の成立順を明らかにすることができた。

(2) 初期読本に与えた上方学芸の伝統の影響については、特に秋成と関係のある京都の国学者（秋成の門人を含む）の業績を調査し、橋本経亮・松本柳斎・釈昇道らの著述を検討して、秋成や彼らが特に『日本書紀』解説や西行の和歌に独特の関心を持っていたことを明らかにした。また、大阪の懐徳堂の国学研究について検討し、特に秋成に影響を与えた五井蘭洲の源氏学の特色を、『源語梯』等から明らかにした。

(3) 初期読本成立の背景の一つとして『古状揃』に着目し、その諸版の整理を進めるとともに、「腰越状」「義経含状」などの義経関係の創作的書簡が、正史の空白を小説的な興味によって埋めるといふ、初期読本と共通の特質を持っていることを明らかにした。

(4) 初期読本成立の背景となっている、漢学者の文集等に収められている史上の人物に関する伝や論を調査し、次の知見を得た。

① 服部南郭の『大東世語』と上田秋成の『月の前』とを比較し、『月の前』は、歴史の裏面に隠された人間のドラマを描こうとする

『大東世語』の方法を一層推し進め、西行と頼朝に登場人物としての明確な性格を与えているのみならず、それを歌書における西行像・歴史書における頼朝像に拮抗するものとして意識的に造形している。

② 林家をはじめとする近世初期・前期の朱子学者の文集に見える、南北朝時代の人物の評価と名分論が、都賀庭鐘の『英草紙』の第一篇・第七篇・第九篇等の南北朝にかかわる話に多大な影響を与え、作品中からうかがえる庭鐘の南北朝史観の前提となっている。

(5) 初期読本の主要な版元と、初期読本の作家・作品との関係については、次の知見を得た。

① 建部綾足の『本朝水滸伝』の合版元である梅村宗五郎は、以前から綾足の俳諧関係書を多く刊行している書肆であり、俳諧・小説のジャンルを超えて綾足の作品を出しているところから、一種のプロデューサーとして綾足の著述活動に継続的に関与していると思われることができる。

② 上田秋成の『雨月物語』の合版元である野村長兵衛は、『雨月物語』刊行以前から大阪文壇のつきあいの中で秋成と顔見知りであり、単なる著者と出版者という以上の関係であることから、野村長兵衛もまた、一種のプロデューサーとして『雨月物語』の成立に関与した可能性がある。

(6) 初期読本の諸作家の世代別特徴について考察し、次の知見を得た。

① 都賀庭鐘を初期読本の第一世代、建部綾足・上田秋成を第二世代、伊丹椿園・前川来太らを第三世代とすると、世代が下るに従って、思想的テーマを重視する文人的な高踏性は徐々に稀薄になり、後期の江戸長編読本と共通する構成重視の娯楽性が前面に出てくる。

② 第一世代・第二世代の作家が、本格的に漢学ないし国学研究に携わっているのに対し、第三世代の作家は、俳諧等の素養はあるものの、漢学・国学については愛好家の域を出るものではない。それが上記の違いを生じている大きな原因の一つと思われる。

(7) 初期読本と後期読本の和文体作品の共通性と異質性については、次の知見を得た。

① 和文体初期読本を多く書いた綾足にとって、それらの作品は、紀行や随筆、書簡などと横並びとなる、あくまでも多様な和文創作の試みの一つであった。

② 石川雅望や村田春海らの和文体後期読本は、職業的戯作者の作品に対し、彼らの作品が国学を専門とする者の余技であることを、和文体を用いることで明確に打ち出したものである。

③しかしながら、和文体初期読本・和文体後期読本ともに、中国典拠の咀嚼、あるいは王朝物語風の風俗と同時代（江戸時代）風俗との描写における融合には、和漢混淆文を駆使した通例の読本以上の意識的な努力が傾けられており、かなり革新的な試みといえる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計9件）

- ① 長島弘明、秋成の著書廃棄、文学、査読無、8巻、3号、2007、26-38
- ② 長島弘明、近世文学における「江戸」像—上方から見た「江戸」・江戸から見た「江戸」—、日本学研究、査読無、第22輯、2007、5-21
- ③ 長島弘明、秋成伝記資料拾遺、秋成文学の生成、査読無、森話社刊、2008、51-70
- ④ 長島弘明、「宮木が塚」考、国語と国文学、査読無、85巻、5号、2008、72-82
- ⑤ 長島弘明、最晩年の秋成、文学、査読無、10巻、1号、2009、43-56
- ⑥ 長島弘明、秋成と蕪村、蕪村全集月報9、査読無、講談社刊、2009、9-12
- ⑦ 長島弘明、上田秋成と朝鮮通信使、Koreana、査読無、16巻、4号、2009、80-81
- ⑧ 長島弘明、物語集としての『藤篋冊子（つづらぶみ）』—秋成における物語の生成—、日本研究、査読無、13号、2010、117-137
- ⑨ 長島弘明、終わらない夢—『雨月物語』、国文学解釈と鑑賞、査読無、75巻、3号、2010、63-70

〔学会発表〕（計5件）

- ① 長島弘明、上田秋成における物語の生成、Narrative, Narrativehood, Narrativity and Nonnarrative in Japanese Prose of the Edo Period 研究集会、2007年5月31日、サレジオ大学（ローマ市）
- ② 長島弘明、秋成小説の「毒」、青山学院大学文学部日本文学科主宰国際シンポジウム2007、2007年9月23日、青山学院大学
- ③ 長島弘明、怪異たちの「ことば」—『雨月物語』の場合—、物語研究会シンポジウム「亡霊とエクリチュール」、2008年3月15日、明治大学
- ④ 長島弘明、『雨月物語』の怪異、21世紀活字文化プロジェクト、2009年6月2日、青山学院大学
- ⑤ 長島弘明、物語集としての『藤篋冊子』

—秋成における物語の生成—、研究集会「日本近世文学・文芸の中心と周縁」、2009年9月18日、高麗大学校（ソウル市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長島 弘明 (NAGASHIMA HIROAKI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：00138182

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：